

イタリア学会
第62回大会 プログラム

2014年11月8日(土)

愛知県立大学
(長久手キャンパス)

会場 愛知県立大学 長久手キャンパス
特別講義棟 (S 棟) S201

◆ 研究発表 I 10:30 ~ 12:00

10:30 ~ 11:00

1. イタリア 16 世紀の文法記述における接続法半過去と条件法現在の形態
向井華奈子 (東京大学) 司会: 鈴木信五 (東京音楽大学)

11:00 ~ 11:30

2. イタリア人の苗字——日本の場合との比較対照において——
渡辺克義 (山口県立大学) 司会: 石坂尚武 (同志社大学)

11:30 ~ 12:00

3. ローマの枢機卿とフィレンツェの聖史劇
—— 1473 年 6 月サンティッシミ・アポストリ広場 ——
杉山博昭 (早稲田大学) 司会: 米田潔弘 (桐朋学園大学)

◆ 休憩 12:00 ~ 13:30

◆ 総会 13:30 ~ 14:30

◆ 研究発表Ⅱ 14:30 ～ 16:45

14:30 ～ 15:00

4. Foscolo lettore ideale di Machiavelli

Daniela Shalom Vagata (京都大学) 司会：武田好 (静岡文化芸術大学)

15:00 ～ 15:30

5. アレッサンドロ・ヴェッリの悲劇論とその革新の試み

菅野 類 (京都大学) 司会：上西明子 (首都大学東京)

◆ 休憩 15:30 ～ 15:45

15:45 ～ 16:15

6. 演出の成立過程における未来派演劇の貢献

菊池正和 (大阪大学) 司会：小林 満 (京都産業大学)

16:15 ～ 16:45

7. アナグラムから見たピランデッロの『神話』と現実

斎藤泰弘 (京都大学名誉教授) 司会：高田和文 (静岡文化芸術大学)

◆ 懇親会 18:15 ～ 20:15

会 場：サンプラザシーズンズ・紅梅の間

名古屋市名東区藤里町 1601 番地

(藤が丘駅からシャトルバスで5分。徒歩で15分)

会費を事前にお振込みいただく必要がありますのでご注意ください。

イタリア 16 世紀の文法記述における 接続法半過去と条件法現在の形態

向井 華奈子 (東京大学)

イタリア語の接続法半過去三人称複数形は、ラテン語の接続法過去完了の語尾 -ISSENT を引き継いだ後、直説法遠過去強変化形 *ebbero, dissero* 等からの類推によって、語尾に *-ero* を含む *avessero, dicessero* 等の形態を得たとされている。またラテン語には存在しなかった動詞形態である条件法現在は、イタリア語へと変化する過程で、不定詞とラテン語 HABEO の直説法完了形のそれぞれが語幹と語尾として結びつき形成されたものである。現代の標準イタリア語では、いずれの時制も三人称複数に関しては、語尾に *-ero* を含む形態が定着している。またこれら 2 つの時制と形態の上で関連付けて語られることが多い直説法遠過去三人称複数形においては、上述の強変化形に加え、*-tt-* という要素をもつ *credettero, temettero* 等の弱変化形もまた、語末に *-ero* を有している。

いっぽう古イタリア語 (14 世紀) においては、このような規則がまだ定まっておらず、多くのヴァリエーションが存在していた。たとえば条件法現在について、ダンテは『神曲』において語尾に *-ono* をもつ形態を一度も用いていないのに対し、ボッカッチョは『デカメロン』(2 日目、第 6 話) のある一文の中で、*potrebbero* と *potrebbero* を交替で用いている。

14 世紀のイタリア語におけるこのような語形のゆれは、結果として、ペトルカやボッカッチョの語法を文学語の模範とする 16 世紀の文法書の記述にも影響を与えることとなった。16 世紀言語問題のさきがけとなるジョヴァン・フランチェスコ・フォルトゥーニオ (Giovanni Francesco Fortunio, 1470?-1517) やピエトロ・ベンボ (Pietro Bembo, 1470-1547) らの著作における当該語形の記述は、それぞれ大きく異なっている。一例として、イタリアで刊行された初めての文法書であるフォルトゥーニオの『俗語の文法規則』(*Regole grammaticali della volgar lingua*, 1516 年刊、以下『規則』) と、ベンボの『俗語をめぐる散文』(*Prose della volgar lingua*, 1525 年刊、以下『散文』) の記述を挙げてみよう。まず『規則』では、接続法半過去、条件法現在三人称複数に相当する語形として、語尾に *-ono* と *-ero* を含む両方の形が挙げられている。そして『散文』では接続法半過去形に

については、語末に *-ono* をもつ語形は「(フィレンツェに) 固有の語でもなければ、さほど使われてもいない語」であるとして、*-ero* をもつ語形のみを認める一方で、条件法現在に関する記述では、語末に *-ono* をもつ語形が推奨されているのである。

上述の時制における三人称複数形態に関しては、13世紀から16世紀までの代表的な韻文・散文作品におけるヴァリエーションの分布について広汎な調査・分析を行ったネンチョーニ¹ (1954) の研究が代表的である。また最近では、コレッティ² (2012) がボッカッチョ作品を中心にこの問題を論じている。こうした研究を踏まえ、本発表では、古イタリア語にみられる接続法半過去と条件法現在の三人称複数形のゆれの実態を念頭に置きつつ、フォルトゥーニオやベンボらによる16世紀のイタリア語文法記述において規範とされた語形選択の動機を考察する。

¹ Nencioni Giovanni, *Un caso di polimorfia della lingua letteraria dal sec. XIII al XVI* (1954), in *Saggi di lingua antica e moderna*, Torino, Rosenberg & Sellier, 1989.

² Coletti Vittorio, *I problemi dell'abbondanza. La polimorfia verbale in italiano*, in *Eccessi di parole*, Firenze, Franco Cesati, 2012.

イタリア人の苗字

——日本の場合との比較対照において——

渡辺 克義 (山口県立大学)

名称学 (onomastica) は言語学の一領域で、固有名詞全般を研究対象とするが、主たる対象は人名 (antroponomastica) および地名 (toponomastica) である。本報告では前者、とくに苗字を扱うが、日本国内における先行研究が多くないことにも鑑み、まずイタリアにおける姓氏研究の概要を報告し、次に日本および他の欧州諸国の苗字との相違に触れつつ、比較文化学的考察を試みる。

姓氏研究は外国人研究者にとって参入が容易であるとも、困難であるともいえる領域である。例えば、A村のB集落にはX姓が大半を占めるが、Yという全国的にも稀少姓の家族が数軒あるとする。この場合、X姓が支配的な理由を探究することも、Y姓の由来を調べることも学問的に意味があり、外国人であるという理由で研究参入を拒まれることはない。この事例のように、研究対象は無尽蔵にあり、外国人であっても一定の研究成果をあげることは必ずしも難しいことではない。しかし、その成果はイタリア語でイタリアの学会で報告した場合に意味があり、日本語で日本の学会で報告しても研究意義の点で問題が残るかもしれない。一方で、姓氏研究は地理学・歴史学・民俗学などが絡む学際的研究であり、広い視野と、古文書を読み解く高度な語学力、地道なフィールドワークが求められる、外国人研究者には容易に立ち入ることができない領域であるともいえる。概して、ミクロ的研究ほど容易で、マクロ的研究ほど困難なのが名称学の特徴といえよう。

日本では従来から姓氏研究は盛んとはいいかねるところがあったが、これに加えて2005年から個人情報保護法が施行され、いっそう体系的な研究が難しくなっている。一方イタリアでは姓氏研究は他の欧州諸国同様盛んで、潤沢な研究成果が出されている。Emidio De Felice, *I cognomi italiani*, Bologna, 1980, はパーソナル・コンピュータが普及する以前に、全国の電話帳を丹念に調べ上げた実証的苗字研究の労作であり、その先駆的業績は今日でも価値を失っていない。日本では、管見によれば、De Felice (1980) レヴェルの研究はいまだに現れていない。

イタリアと日本の苗字全般に関し共通している点は、(1) 苗字の種類が豊富であること (イタリア — 約35万種, 日本 — 約30万種), (2) 数十から数百の極

めてポピュラーな苗字が存在する一方で、「人口÷苗字数」（イタリア — 約 170, 日本 — 約 420）〔これは同姓の人の数の平均値を示す〕より下の値を示す姓が大多数であること, (3) 苗字の語源では地名・地形由来のものが多いこと（とくに, 日本の場合は 8 割以上を占める）, (4) ローカル色のある苗字が多数存在すること, (5) 珍奇な語源を持つ姓が少なくないこと, などが指摘できよう。

イタリア（および他の欧州諸国）では比較的良好に見られるが、日本では数が少ないか、あるいはまったく見られない苗字の型としては、(1) 先祖名（個人名）由来, (2) 職業名由来, (3) 綽名由来, (4) 縮小辞・拡大辞付き, (5) De / Di 型, などがある。

逆に、イタリアに対応する型が見られない日本の苗字としては、(1) 言葉遊び型（例：小鳥遊^{たかなし}, 四月朔日^{わたぬき}など）, (2) 忌み詞型（例：鬼塚, 鬼原など。イタリアに Diavolo や Demonio という姓は見当たらない）が指摘できるだろう。

ローマの枢機卿とフィレンツェの聖史劇 —— 1473年6月サンティッシミ・アポストリ広場 ——

杉山 博昭（早稲田大学）

ナポリからフェッラーラの花婿のもとへ向かうエレオノーラ・ダラゴーナは、逗留先のローマでとあるフェスタを見た。1473年の6月6日から9日にかけて開催されたこのフェスタは、壮麗な凱旋行列と豪華な祝宴をとおして人口に膾炙する。エレオノーラとともに大観衆が見物したこのときの出し物には、『スザンナ』『聖体』『洗礼者の斬首』『聖ヤコブ』の上演も含まれていたことがわかっている。一連の行事を取り仕切った枢機卿ピエトロ・リアーリオが、フィレンツェから兄弟会会員を呼び寄せ、聖史劇を制作させたのである。

じつはその後、ローマを発ったエレオノーラはフィレンツェに立ち寄り、同年同月の22日から23日にかけて今度はシニョリーア広場で別のフェスタを見物している。この洗礼者聖ヨハネのフェスタで執り行われた宗教行列と聖史劇は、ロレンツォ・デ・メディチが兄弟会に助成金を支出することでいっそう豪華に演出されたことは、ジュスト・ダンギアーリなど複数の日記が伝えるとおりである。

これら一連の道行きをふまえるなら、次の事実が浮かび上がるだろう。つまり、エレオノーラは数日後のフィレンツェで聖史劇見物の機会を得ることが予期されたにもかかわらず、リアーリオ枢機卿はなおも彼女をフィレンツェ聖史劇で歓待することにこだわったという事実である。フィレンツェの文脈に照らせば、このことは聖史劇の世評の高さを示しているにちがいない。一方、ローマの文脈ではこのことをどのように解釈することができるだろうか。

従来、サンティッシミ・アポストリ広場を彩った豪華な装飾への言及はあった。しかしながら上演内容にまで踏み込んだ考察は、いまだなされていない。これら先行研究の傾向は、祝祭の重要性を表象それ自体ではなく付帯状況に求めてきた社会史研究の方向性を反映していると言える。しかしリアーリオ枢機卿があくまでもこだわって招聘した兄弟会会員が、そこでいったい「何を上演したのか」という問いは、依然未検討の有意義な課題であることは言うを俟たない。

そこで発表者は、まず当時のローマの社会状況を確認するとともに、教皇シクストゥス4世の甥でもあるリアーリオ枢機卿に注目する。枢機卿その人が、サン

ティ・アポストリ聖堂に隣接する絢爛たる自邸を建て、常軌を逸したと称される午餐を開く健啖家でありつつ、詩人・音楽家・人文主義者の庇護者でもあり、貧者への施しなど福祉的施策にも大々的に取り組んだという事実は示唆的にちがいない。また同時期のフィレンツェにおける聖史劇の上演記録を概観し、ローマで上演された演目は『洗礼者の斬首』を除くと、けっして一般的なレパートリーではなかった事実を確認する。その上でその四つの聖史劇を際立たせる要素として、各上演時テキストから浮かび上がる「凄惨な処刑」「性的な場面」「他者の存在」に注目する。

フィレンツェとローマそれぞれのコンテキストの交点から、1473年6月のサンティッシミ・アポストリ広場における上演の政治性と受容の可能性を考察することが、本発表の試みである。結論として、煌びやかな衣装や臨席する貴賓、贅をこらした祝宴といったフェスタを構成する他の要素と並んで、聖史劇の上演内容もそれらに匹敵する重要性を持ち得たことを指し示したい。

Foscolo lettore ideale di Machiavelli

Daniela Shalom Vagata (京都大学)

Il mio intervento si propone di spiegare l'influenza del pensiero di Niccolò Machiavelli nelle riflessioni politico-religiose di Ugo Foscolo e nella sua elaborazione di un concetto civilizzatore di letteratura. Scrittore e poeta, fine lettore e interprete del pensiero di Machiavelli, Foscolo non è soltanto fautore di un'immagine patriottica, liberale e repubblicana del segretario fiorentino, ma condivide con Machiavelli la stessa idea umanistica di letteratura che insegna a cercare e a riconoscere il vero e il bello morale.

Il pensiero di Machiavelli in modo più o meno esplicito è presente in quasi tutte le opere foscoliane: dai tentativi di critica al libretto su Machiavelli di Ridolfi, confluiti nei cosiddetti *Frammenti su Machiavelli* dell'*Edizione Nazionale*, ai saggi del periodo inglese sulla letteratura, dagli articoli su Gregorio VII e Pio VI alle orazioni e lezioni pavesi, dal commento alla *Chioma di Berenice* ai *Sepolcri* e alle *Grazie*. Vorrei dunque tracciare un percorso che tocchi alcuni snodi fondamentali delle convergenze tra i due scrittori. È noto infatti che lo studio di Machiavelli induce Foscolo a fare suo il concetto di "realtà effettuale" e a considerare i testi degli antichi una chiave di interpretazione del presente, meno noto è invece il fatto che l'ammirazione per l'autore del *Principe* sia legata alla concezione religiosa di Foscolo e a ragioni più prettamente letterarie.

Quanto alla religione, oltre al mito polemico dell'invadenza temporale dei papi, Foscolo condivide con Machiavelli la necessità di una riforma della Chiesa verso un suo ritorno alle origini. Il ritorno a forme evangeliche di vita diverrà per Foscolo icona di un messaggio di indipendenza e di unione nazionale, che partendo dalla condanna delle associazioni fratesche e delle sette, e dal risanamento morale e civile del clero, giunge alla teorizzazione di un legame forte e rinnovato tra il governo del regno e una Chiesa prettamente italiana, non soggetta al dominio straniero.

Quanto alla letteratura, Foscolo non pone alcuna distinzione tra il Machiavelli politico e il Machiavelli letterato, e salda la riflessione sulla lingua del segretario fiorentino a una prospettiva pubblica: l'elogio dello stile e della lingua machiavelliani si motiva nella sua caratteristica di "istruire dilettaando", perché in grado di risvegliare nelle menti dei lettori gli affetti che ga-

rantiscono il vivere civile. Una delle conseguenze di questa idea di letteratura è la polemica, in comune tra i due, contro gli scrittori cortigiani e prezzolati asserviti al potere.

È tuttavia nell'intreccio tra letteratura, politica e religione che l'adesione foscoliana al pensiero di Machiavelli si fa più scoperta e al tempo stesso profonda. Il discorso prende spunto sia dalla concezione religiosa di Machiavelli come vincolo politico e connettivo sociale, strumento di educazione del popolo e al tempo stesso sistema di valori in cui identificarsi, sia dall'idea che l'arte della parola sia alle fondamenta di un insegnamento politico. A partire dalla *Chioma*, passando per i *Sepolcri*, discutendone nell'*Orazione inaugurale*, e giungendo alle *Grazie*, Foscolo elabora così un genere di poesia legata al sacro e al politico, strumento principe di educazione civile ed esaltazione di quei principi morali e sociali che si contrappongono agli istinti umani di sopraffazione. Ne deriva pertanto un ritratto inedito di Ugo Foscolo: Foscolo lettore ideale di Machiavelli, nel segno dell'elogio al potere civilizzatore della parola e nel sogno di un'umanità dialogante e tollerante.

アレッサンドロ・ヴェッリの悲劇論とその革新の試み

菅野 類 (京都大学)

アレッサンドロ・ヴェッリは定期刊行誌『コーヒー店 (*Il Caffè*)』への積極的な寄稿という形でおおよそ2年間は兄ピエトロ・ヴェッリの啓蒙活動に協力をしてきた。しかし、その後の旅行でローマに立ち寄った際、ある女性と熱烈な恋に落ちたことが引き金となって、公的な名声を望む生き方を拒絶し、平穏な生活に安らうことこそ自身の性質に適った生き方であるとの認識を得るに至った。これに伴い、社会改良の意欲と文人としての才能を世に認めてもらうという野心も放棄されることとなる。『コーヒー店』時代に書かれた論評の多くを自ら否定し、また、印刷を進めていた *Saggi sulla Storia d'Italia* に対しても、ピエトロの再三にわたる促しに応えず、最終的な出版の許可を出すことはなかった。

ローマへの移住後、創作の意欲に燃えるアレッサンドロを再び目の当たりにすることができるのは、10年以上の年月を隔ててのことである。1778年4月に恋愛悲劇 *Pantea* を、そして同年6月には陰謀物の悲劇 *La Congiura di Milano* をピエトロに送り、突如として批評を求めているのである。この時の感情の高ぶりを、アレッサンドロは次のように表現している。「自分がこんなにも興奮していることに最高の喜びを感じる。大地はまだ不毛ではないということを示してくれる若干の裂け目が、やはり私には残っているということが分かるからだ (Io ho piacere sommo di essere così scosso, giacché vedo che alla fine ho dei squarci che fanno vedere che il terreno non è sterile)」(1778年6月27日付の手紙より)。

これを契機として、二人の書簡はにわかには18世紀のイタリア悲劇のあり方をめぐる議論の場へと変化する。アレッサンドロの詩論もまたこれらの議論を通じて、すなわち、イタリアおよびフランス悲劇に対する不満、アリストテレス主義への懐疑、そしてシェイクスピアを優れたモデルとみなす当時のイタリアでは珍しい姿勢などを通して、書簡を追う私たちの目にも次第に明らかになってくる。

アレッサンドロの創作意欲を突然に刺激した悲劇の執筆という試みであったが、最終的には、この二つの悲劇が多くの人に読まれることはなかった。ピエトロの激賞にもかかわらず、身近な人の反応を探るうちに、読み手を熱狂させるだけの魅力を備えているわけではないと作者自身が判断するに至ったからで

ある。しかしながら、不首尾に終わったこの冒険の果てに、アレッサンドロは「とりわけ感情の力強さとか優しさに関しては自信がある。筋の運びに関しても、イタリア人の少数にして無名な我が先駆者たちよりも考えを凝らした自信がある (Piuttosto quanto alla forza e tenerezza de' sentimenti sono persuaso, e quanto anche alla condotta, di aver pensato più de' miei pochi ed oscuri antecessori italiani)」(1782年1月16日付の手紙より)との自負をのぞかせてもいるのである。

イタリア文学史研究において、アレッサンドロの演劇的試みに言及がなされることはごく稀である。そうした場合であっても、作者のロマン主義的な感性が指摘されるか、保守的思想の表出の場として扱われるかのいずれかが一般的である。当時不毛とされていたイタリアの悲劇というジャンルに、代表作を打ち立てようという野心的な取り組みであったにもかかわらず、その芸術上の意図に十分な関心が向けられているわけではないのが現状といえる。自作の評価を広く世に問うことをしなかったために文学史上の影響力を持たなかったとはいえ、同時代の悲劇詩人ヴィットーリオ・アルフィエーリが行ったアプローチとの類似性を考慮するならば、その試みの妥当性は相応に評価されるべきであるように思われる。

果たしてアレッサンドロは「イタリア人の少数にして無名な我が先駆者たち」以上にどのような工夫を凝らしたのか。本発表では、悲劇のあり方をめぐるヴェッリ兄弟の議論を中心としながら、イタリア悲劇に対し活力を与えようとしたアレッサンドロの試みを紹介することとする。

演出の成立過程における未来派演劇の貢献

菊池 正和 (大阪大学)

ヨーロッパ演劇史において、舞台における劇の上演の諸要素を統括する、近代的な意味での演出家が誕生したのは19世紀後半のことである。それは、当時の自然主義に基づいた劇作法の成熟が、俳優の新しい演技術と視覚的な舞台造形の調整を要求したことから生まれた職能であった。ただしイタリアにおいては、旧態依然とした座長制度の残存やスター俳優の身体性に過度に依存した演技術などを背景に、こうした演出家の登場は他のヨーロッパ諸国と比べ70年ほど遅れたといわれている。

しかし、演出の本質を「戯曲テキストと劇場空間におけるその上演との関係性の追求」とするならば、イタリア演劇における演出の成立過程の出発点に、1910年代からの未来派の演劇行為を位置づけることが妥当ではないかと主張することが本研究発表の主旨である。

未来派の夕べ（セラータ）における種々のパフォーマンスで、あらゆる方向に開かれた演劇を準備したマリネッティら第一世代は、1911年に「未来派劇作家宣言」、1913年に「ヴァラエティ・シアター宣言」を発表し、19世紀的な市民劇のドラマと決別するとともに、非記載的で反テキスト性の高い演劇行為を推進し、同時に演劇空間を拡大して観客を劇的行為の内側へと取り込むことを提案する。この時点では、旧来の演劇の破壊といった側面が強く、新しい劇作法の創出とその実践という段階にはまだ達していなかったが、1915年に発表する「未来派総合演劇宣言」と、そのマニフェストの実践行為としての *sintesi*（「総合」）と記されたごく短い戯曲の上演において、それらを実現する。*simultaneità*（「同時性」）や *compenetrazione*（「浸透」）、*frammentazione*（「断片性」）といった明確な構造的な特徴を有し、（口語化、物質化されていたとはいえ）記載された言語テキストに基づいて構成され、舞台装飾や振付法といった視覚効果や運動感覚にまで配慮した総合演劇は、演出行為の環境的・技術的基盤を準備したといえるのではないか。

その後、20年代に入ると、未来派演劇はテキスト性の本質的な再発見を伴った劇作法の再構築へと向かうことになる。1920年に「視覚的演劇宣言」を発表したマスナータは、登場人物の心的状態の「語り」を主観的に脚色された視覚的

ヴィジョンの中へと統合していき、またヴァザーリは、それまでの未来派に共通した機械信仰に疑問を抱き、人間－機械の関係性を問い直すドラマにおいて、科学技術的な図像学の中へ詩的言語を織り込んでいく。こうした演劇の試みにおいて、戯曲テキストと舞台上演の双方に注意が向けられるのである。

このように未来派演劇は、言語的－ジェスチャー的な次元における従来のコードの破壊から始まり、空間的－舞台装飾的なコードの再検討を経て、新しい劇作法の創出へと進展する契機であったが、その過程において舞台装飾家が果たした役割もまた特筆すべきである。中でも、戯曲テキストと舞台装飾を一つに収斂させる演劇の相対的な総合のうちに劇的發展の必要性を説いたプランポリーニの理論は重要であると思われる。

以上、本発表においては、マリネッティら第一世代により起草された3つのマニフェストと、その実践としての総合演劇との照合から分析を始め、次にマスマナータやヴァザーリといった第二世代の未来派演劇を本邦初紹介する。その過程でプランポリーニら舞台装飾家の貢献にまで視野を広げて検討することで、未来派の劇作家と舞台装飾家の演劇活動のうちに、後の演出家の出現を準備する素地があったことを明らかにしていきたい。

アナグラムから見たピランデッロの『神話』と現実

斎藤 泰弘 (京都大学名誉教授)

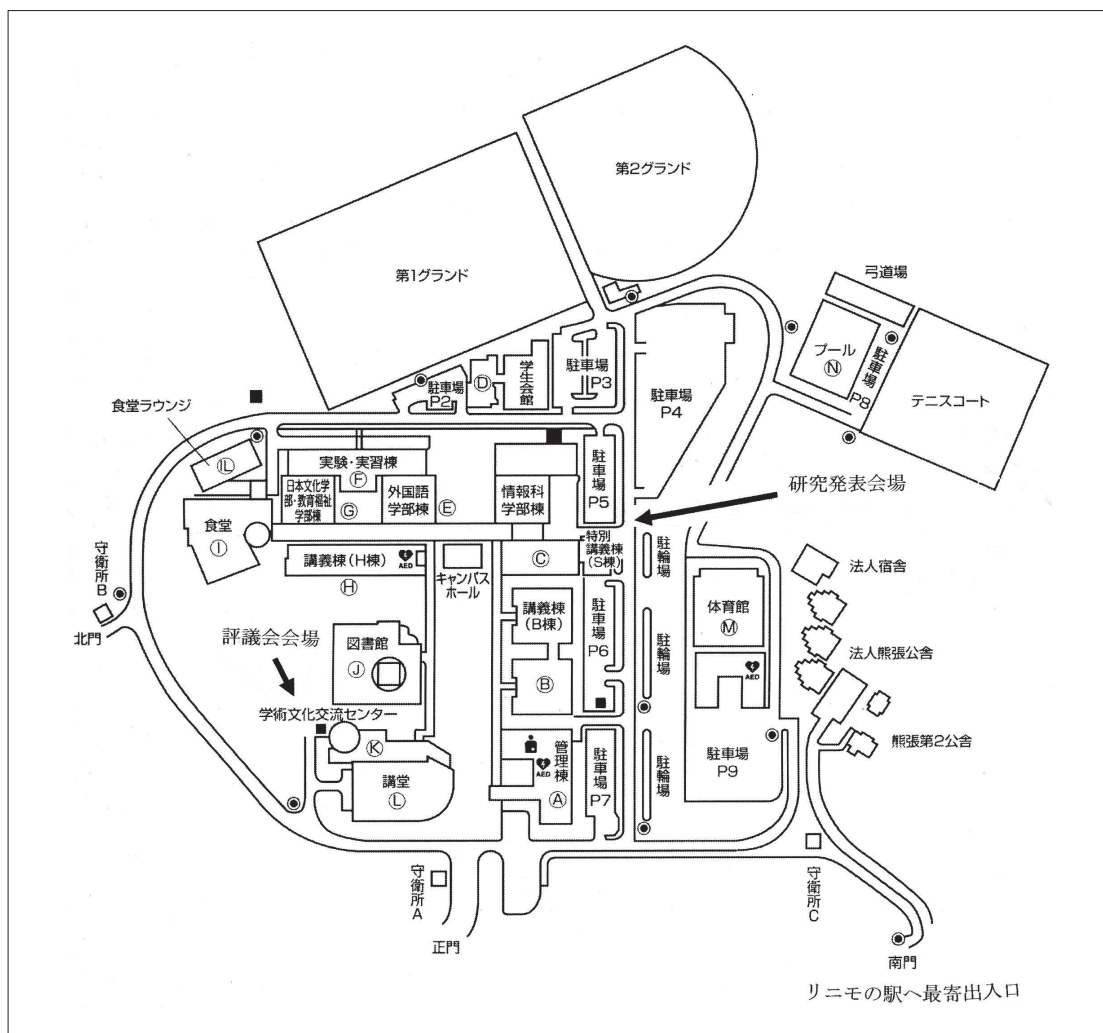
ピランデッロ劇の基本的な評価については、G. Giudice (1963) の判定が、その後数十年にわたってピランデッロ研究者たちの評価を方向付けたように思われる。それによれば、ピランデッロの想像力の豊かな源泉は、『6人の登場人物』(1921) と『エンリーコ4世』(1922) をピークに、その後次第に枯れ始めるが、まさにその同じ時期に A. Tilgher の《生と形の相克》理論によるピランデッロの哲学的解釈 (1922) が現われて、劇作家は自分の想像力の枯渇を補うために、この理論を《人工の川床》として利用した、という評価である。それゆえ、彼のその後の作品群は、マンネリ化した《ピランデリズム》であると見なされて、あまり高い評価を受けて来なかった (この低い評価の裏には、彼のファシズムへの加担 (1924年にPNF入党) に対する政治的糾弾や、女優マルタとの老いらくの恋への倫理的な批判も潜んでいたことは言うまでもない)。

このような戦後の反ファシズムの知識人たちの定説に対して、ピランデッロの後期作品を再評価する試みは、1980年代の終りになって生じた。その先鞭をつけたのは U. Artioli (1989) で、彼は neo-ermeneutica (新解釈学派) という名前と呼ばれることから窺われるように、ピランデッロのテキストを昔の聖書解釈学のように超歴史的かつ象徴的に解釈し直して、彼の想像力の世界が、古代の秘儀の世界と通底する汎神論的な世界であることを証明しようとした。したがって当然アナグラムのような謎めいた解釈も有効な手立てとみなされる。彼がその一例として挙げるのは、未完の神話『山の巨人たち』に登場するはずだった、巨人族の新郎新婦の名前である。花嫁《Uma di Dornio》と花婿《Lopardo d'Arcifa》を、アナグラムとして解釈すると、前者は《Un dio di Roma》(ローマの神)、後者は《Lopardo d'Africa》(アフリカの豹) となる。もしピランデッロが意図的にこの文字遊びを巨人族の名前に潜ませたとすると、《ローマの神》は当然ムッソリーニを指し、《アフリカの豹》はエチオピアのメタファーであるから、この両者の結婚というのは、ファシスト政権によるエチオピア侵攻と植民地化政策に賛意を表するアナグラムだということになる (この巨人族の挙式に触れた神話第2幕の発表は1934年11月で、エチオピア侵攻はその翌年10月、だが侵攻準備と侵攻を

正当化するプロパガンダは1934年初めから進められており、ピランデッロ自身も侵攻前にアメリカに派遣されて、マスコミのインタビューを通じてファシズムの宣伝役を務めている)。しかしながら、この謎解きをしたArtioli自身も、ここまで踏み込んで断定する自信はなかったようで、《テキストの地層の中には、まったく異なったパロディーが、しかも違った意味で辛辣なパロディーが潜んでいる可能性がある》と曖昧に述べるだけで、それ以上突っ込んで論じようとはしていない。

実は発表者は、新解釈学派の超歴史的なテキスト解釈については、否定的な見解を抱いているが、この偶然に開けられた風穴から見える新奇な風景は、大変に興味深いものであった。というのは、《ローマの神》と《アフリカの豹》の結婚という神話的イメージは、まさにピランデッロの不倶戴天の敵、ダヌンツィオの豪華な超人の世界（とりわけ『愛以上のもの』の冒険家ブランド）を彷彿とさせるからである。そこで、このアナグラム解釈の妥当性についてさらに議論を深めて、もしかしてその下には、さらに2番底があって、そこにはこれまで研究者の誰も知らなかった秘密のメッセージが隠されているのではないか、という発表者自身の憶測を、ピランデッロ晩年の政治・社会観と突き合わせて検討する。

キャンパス



懇親会のご案内

日時：大会当日 18時15分から20時15分まで

会場：サンブラザシーズンズ・紅梅の間

(リニモ「藤が丘駅」からシャトルバスで5分。徒歩で15分)

名古屋市名東区藤里町 1601 番地 Tel: 052-774-0211

会費：¥6,900- (学生 ¥4,500-)

同封の振込用紙で9月30日までにお払ください。

お払後のキャンセルはご遠慮願います。

*お支払いいただいた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記します。

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部 イタリア語学イタリア文学研究室内

Tel. & Fax: (075)753-2774

E-mail: studiit@bun.kyoto-u.ac.jp

URL: <http://studiit.jp/>